

# ペドロ・アルモドバルの『ハイヒール』 (Pedro Almodóvar, *Tacones Lejanos*, 1991) が語る、父の支配を逃れる母と娘 の秘密について：精神分析の視点から

伊集院 敬行

「メランコリー・メロドラマ：アルモドバル的悲哀と失われた同性愛的な愛着」(*All about Almodóvar: a Passion for Cinema*, 2009所収)でリンダ・ウィリアムズは、『ハイヒール』のメロドラマとしての特徴——主人公レベーカーの母ベッキーへの愛と憎しみ、遅すぎた二人の和解、感情を盛り上げる歌——を「メロドラマのクィア化」として解釈するために、『ジェンダー・トラブル』(1990)や『権力の精神生活』(1997)でジュディス・バトラーが論じる「ジェンダー・メランコリー」としてレベーカーのメランコリー気質を理解する。論文中、ウィリアムズがジェンダー・メランコリーを、『アコースティック・ミラー』(1988)でカジャ・シルバーマンが用いる「陰性のエディプス・コンプレックス」として説明するのもそのためである。そしてこのようにして『ハイヒール』にメロドラマのクィア化を認めることでウィリアムズは、悲劇の形で語られてきた父と息子、母と息子の関係と違い、喪失をそれとして認めることができないメランコリーゆえに語られることのなかった母と娘の情熱と歓喜に声を与えるものとして、『ハイヒール』を高く評価する。

しかし、この論文がバトラーとシルバーマンを用いてメランコリーとメロドラマを結びつけることに成功しているからこそ、次のような疑問が生じる。すなわち『ハイヒール』のポスターに暗示されるハイヒールと拳銃のファルスとしての性格は、ジェンダー・メランコリーの語でどう説明できるのか。また、ドラッグの攪乱的な力やジェンダーのパフォーマンス性を論じるバトラーを用いるなら、ドラッグのパフォーマーのファム・レタルや、留置所で繰り広げられる魅力的なダンスはどのように分析できるのか。残念ながらウィリアムズはこれらのことに触れていない。

そこで本発表はこれらの疑問に答えるべく、成人女性としての主人公のメランコリーを論じるウィリアムズに対し、主人公を幼児として捉えることで本作におけるハイヒールと拳銃が持つファルスとしての性格を問う。これによりレベーカーにとってハイヒールと拳銃が母のファルスであり、ファム・レタル/ドミンゲス判事がそのドラッグにより、レベーカーのジェンダー規範の攪乱と形成をもたらす者であることが明らかになる。女と男の両方の特徴を持つファム・レタル/ドミンゲス判事は、レベーカーの前にまず母、次に父、そして最後にはセクシーな男エドゥアルドとして現れることで、幼児としてのレベーカーのジェンダーを、女兒の陰性のエディプス・コンプレックス(=ジェンダー・メランコリー)、女兒の陽性のエディプス、そして異性愛の女性へと成長させていくのである。

(いじゅういん たかゆき/島根大学)